

## オネイロイは樂園のなか

須加

光の届かない、けれどびかびかと輝く不思議な森の奥の奥。毒々しい緑色の木々が我も我もと葉を生やしているその少しの隙間。

見逃してしまいそうだけれどそこに確かに建っているのは、うにょろうにょろと可愛らしく伸びる蔓に森の一部に取り込まれようとしておられるのをのらりくらりとかわしている小さな古びた木の家でした。

そして家の中、木をちぐはぐに組んで作られたベッドの上。一人眠るは、ちっちゃなイリス。

いつもどおりに朝が来ました。

イリスは目が覚めたことに気付いたので、身を起こしました。ベッドの脇にぬいてあった灰色のショートブーツを履き、二重瞼のぼつちりとした目を二、三回ばちばちさせてからスリッパドレスの上に、灰色のポンチョを着込みます。

「わたしが一番美しいわ」「わたくしの美しい歌声をお聞きなさい」

朝露が森を湿らす頃始まる、葉っぱや花びらを振り乱しながらの貴婦人たちの自己主張。イリスが窓枠に手をつけて背伸びをしてそっと

覗きこむと、本当とはったりをないませにした言い争いに、近くで黙ってただ耳を傾けているはつきりとしたアクアマリン色の小川が（物言わぬものが一番美しい）といつもどおりに思っているようでした。

こんこん。

控え目なノックが聞こえて、イリスは「どうぞ」と声をかけました。誰かは分かっていました。

「おはようございます、イリスさん」

「おはようございます、『朝のひと』」

白い癖っ毛の髪をゆるく肩まで伸ばしたその中性的な男のひとはいつもどおりに白い服を着て、優しく微笑みました。

「今日は何を持ってきてくれたのかしら」

「牛乳と、チーズを」

イリスがそばに寄ると、『朝のひと』は腕に引っ掛けていたカゴを差し出してくれました。白くたゆたう液体にコルクで栓をした不透明なビンと三角形のチーズが入れてありました。イリスは受け取って、微笑み返します。

「ありがとうございます」

「いいえ。そういうば、月の具合はいかがですか」

「あら、まだ朝になってから見ていなかったわ。見ていきますか？」

こくり、静かに首肯した『朝のひと』を、イリスは一つだけある奥の部屋へと導きました。

その部屋では、イリスの背丈以上ある、おおきなおおきなガラスのビンが部屋の真ん中を陣取っていました。

「元気そうで良かったわ」

イリスは慈しむ手つきでビンに触れました。

イリスは、月を飼っています。

もう少し正しく言うと、痩せていたり太っていたりと様々な月の兄妹が出番の前にイリスのところにやってきて、輝く前の一休みをするのです。

エメラルドグリーンの水にとっぷり浸かっている細い月が気持ちよさそうに揺れました。きらり、きらりと水泡が煌めいて、水面にぶつかって消えていきました。

「私も、元気そうな様子を見て安心しました。そろそろ、行かなくては」

「そうですか。じゃあ、また明日」

イリスが手を振ると、『朝のひと』は深々と会釈をして部屋を出て行きました。

それを見送ってから、イリスは部屋の中にあつた椅子を引きずってきて、ビンの傍に置きました。イリスは大抵こうして一日中、月の様

子を見守っています。ですが、今日はそのような日にはなりませんでした。

『朝のひと』が来てから、暫く経った頃です。

「こんにちは」

聞き覚えのない声に、イリスは小首を傾げました。ベッドがある部屋から聞こえてくるようです。誰か来たのかもしれない、イリスは軽く跳ねて椅子を降り、月の部屋を出てみました。

「誰も居ないのかな、あ」

ぎい、とドアを勝手に開けて出てきた訝しげな顔はイリスを見た途端、しまった、というような表情に変わりました。

「どちら様？」

「ああ、ごめんなさい。誰も居ないのかと……あ、僕は、『旅人』です」  
確かに、『旅人』は旅人らしい服装——レザーでできた手袋をして、しっかりとしたジャケットを着こんで、どんなものでも踏みしめることのできそうな立派なブーツに、ばんばんのナップザックを背負って——をしていました。

「疲れたので、休ませてくれませんか？」

「構いません。どうぞ」

イリスが手で部屋の中を示すと、「よかった、ありがとう」とお礼を

言いながら『旅人』はイリスの家に上がり、ベッドの部屋の真ん中に据えられていた、朽ち始めている木のテーブルに荷物を置き、椅子に座りました。

イリスは月の部屋からずると椅子を引っ張ってきて、自分もそこに座りました。

「何か、お飲みになりますか？ あいにく、牛乳しかありませんけれど」

「ああ、お構いなく。とにかく、疲れたんです」

ふうと深いため息をつく『旅人』を見てイリスは不思議そうに目をぱちぱちさせました。

「そんなに長く、旅をされたの？」

「そうだね。大変な距離を」

「ぜひ、お話を聞きたいわ」

そうだねえ、『旅人』は思い出を手繰り寄せるようにゆっくり息を吐き出しながら言ったのち、「じゃあ、とびきり素敵な国の話を」と少年の光を目に宿して話し始めました。

「寒いところだった。それに小さかったけれど、毎日がお祭りみたいな国だった。みんな陽気で、笑って、仕事も、葬式さえも笑ってこなす。辛いことを辛くと思わない、不思議な国だった」

「へえ」

「旅人の僕のこと、初めましてなんて言わずに、最初からその国に

いたように接してくれるんだ。僕は、気に入ってね。そこに住もうと家を買った」

『旅人』は机の上のナップザックの肩ひもを指に巻きつけて弄びました。イリスには、それはその先を言いあぐねているように映りました。

「でも、出来なかった。住み始めたなら、僕にとってあんなに魅力的だった国が急に色を失って見えてきたんだ。僕は、いつもそうだ」

「いつも？」

「そう、どこでもずっと住むことができない。打ち込めることがどうしても見つからない。それを見つげるために旅に出た筈だったのに、僕はまだ答えを見つけれない」

ふうん、イリスは気のない相槌を打ちました。『旅人』の言っていることがよく分からなかったからです。

「君には何かある？ そういうもの」

「そういう……？ ないわ。分からないもの」

「それでいいのかい？ どうして生きているか分からなくならないかい？」

イリスはふうんと唸って、考えました。頑張って考えたけれど、やはりさっぱり分かりませんでした。

「生きたいから、生きてます。死にたくなったら、死にます」

「え？」

「人間は、いっぱい居るんでしょう？」

イリスは、左手の人差し指を立てて、右の掌の斜め上に置きながらそれを上下にゆらゆらさせました。今度は『旅人』が首を傾げる番のようです。

「人間は確かにたくさんいるよ。本当にたくさんね」

「だったら！ 生きているリュウやイミなんて、全部の人間にあつたら考える神様が大変なことになってしまうもの」

イリスは遊ばせていた両手を口元に持つてきてとても可笑しそうに笑いながら言いました。『旅人』は一時面喰つて口をあぐりさせましたが、イリスにつられて「それもそうだ」と笑いました。

「ふふ、それにしても、『旅人』さんは可笑しなことを仰るひとなのですね」

「ええ？」

「だって、貴方は『旅人』つてご自分で仰つたのに。旅をするひとが、旅人なんでしょう？」

イリスは尚もくすくすと笑い続けましたが、今度は『旅人』がつけられることはありませんでした。じつと真つ直ぐにイリスを見つめてから、「ああ、しまった！」と手で顔を覆いました。

『旅人』さん？」

「僕は、旅に出るよ。これからもずっと、旅三昧だ！だって『旅人』なんだから」

落ち込んでいるかのように見えた『旅人』は一転、唐突に至極当たり前のことを嬉しそうな顔で、そして高らかな声で言い放つて、ナツプザックをぐいと掴み、立ち上がりながら勢いよく背負いました。

「ありがとうございます」

「よく分からないけど、元気が出たようで良かったわ。貴方に神の恩寵がありますように」

旅立つらしい『旅人』を見送るためイリスも立ち上がり、笑顔で言つてひらひらと手を振りました。『旅人』は幼い男の子のような光る瞳を樂しげに細めて、手を振り返してイリスの家を出て行きました。

いつもどおりに夜が来ましたがんがん。

乱暴なノックが聞こえて、イリスは「どうぞ」と声をかけました。

誰かは分かっていました。

「こんばんは、イリス」

「こんばんは、『夜のひと』」

白い癖つ毛の髪をゆるく肩まで伸ばした、『朝のひと』と全く同じ顔

のその男のひとはいつもどおり黒い服を着て、満面の笑みを乗せました。

グリーンの水だけがうすぼんやりと光っていました。

「夜を知らせに来たよ」

「いつも有難う」

『夜のひと』はお礼を言ったイリスの頭をぐりぐりと撫でて、「今日も小さいな！」と笑い飛ばしました。その言葉にイリスは不服げに唇を尖らせました。

「ああ、そうだ。月の具合はどうだ？」

「貴方と同じく、とても元気よ。もうそろそろかもしれないわ」

「見てもいいか？」

「構わないわ」

イリスより先にずんずん歩いて行った『夜のひと』は奥の部屋を覗き込んで「あ！」と声をあげました。

「なあに？ ……あ」

疑問を口にしたが後ろから中を覗いたイリスも同じように声をあげました。

おおきなおおきなガラスのビン。

その中に、もう月の姿がなかったからです。

水泡が悲しげに水底にぶつかって煌めきながら霧散していきました。

真っ黒の暗闇に包まれる部屋の中、そうして大きく波打つエメラルド

To be Continued..